

諏訪市博物館「活字化プロジェクト」と専修大ゼミ

源氏物語 研究成果は

諏訪市博物館（同市中洲）は6日、同館の「高島藩主諏訪家伝来『源氏物語』活字化プロジェクト」と、専修大学国際コミュニケーション学部日本語学科の斎藤達哉教授のゼミ生による合同研究発表会を館内学習室で開いた。プロジェクト参加者6人とゼミ生5人が登壇し、それぞれが取り組んだ源氏物語についての研究成果を発表した。

（山本雄太）

研究成果を
発表する専
修大学の学生

人の手で書き写されてきた源氏物語の写本（全54帖）にはいくつか系統があり、諏訪家が所有していた写本がどの系統なのか調べようと同館が



プロジェクトを企画し、一般参加者を募集。集まった55人に昨年12月、およそ1人1帖分の諏訪家本の写真データと該当部分の他本の翻刻資料を渡し、各自1字ずつ照らし合わせて異なる箇所を書き込んで提出してもらった。

今年2～5月には毎月、古文初心者向けの「みんなで読む会」を同館で実施。そこで斎藤教授に講師を務めてもらった縁で発表会を計画した。

斎藤教授がプロジェクトに関わったことを機に、源氏物語を同ゼミの研究題材とし、筆跡や文字配置が酷似する諏訪家本と同大学所蔵の写本との比較調査を行ってきた。

発表では、プロジェクト参加者が、物語の考察、当て字や書写者の筆跡に着目して分かったことなどを紹介。ゼミ生は、二つの写本の改行位置や漢字表記などの共通点と相違点を踏まえ、「見た目の類似は共通の手本となる本を書写したことを表している。また、書写者の個性の介在が可能な部分を比較すると、書写者は異なる人物と推測できる」とした。

斎藤教授は「参加した方は専門の勉強をしてないのに、専門家レベルの知識を蓄えている。発表内容は、少し修正すれば大学院レベルかそれ以上の論文になる」と評価し、「全国でも注目されている取り組みだと思う。プロジェクトと関わることで、学生にと

っても学習意欲を高める良い機会になった」と話した。

発表会には発表者、発表者以外のプロジェクト参加者、一般聴講者ら約30人が集まった。発表会後、昼休憩を挟み、斎藤教授による講演会が開かれ、約50人が聴講した。